エッセイ

世界へ 世界から

未来

養老 孟司

最近は暇があると、虫の標本ばかり見ている。いくら見ても、それまで自分がきちんと見ていなかったことに気づく。それまで気づかなかった、新しい発見がある。世界をちゃんと見るには、人生は短すぎる。しみじみそう思うようになった。

そんなことはわかっている。若いときには、よくそう思った。でも本当はわかっていないのである。個々のものは見えても、見えたもののあいだのつながりがわからない。ものごとの関係は順列組合せだから、たいへんな数になってしまう。しかもそのつながりに、深い意味があるときと、ないときがある。

意味のあるつながりがひとつでも見つかると、とても嬉しい。学問上の発見とはそのことである。他人がどう評価するか、それはじつは無関係である。その嬉しさは、経験しないと、むろんわからないであろう。古稀を越えて、そのつながりをまだ探し続けている。

それだけやっていられれば、こんな幸せはない。そう思うけれども、浮世の義理がいろいろある。それを怠けてもいいと思うほど、もう若くもない。若いときなら、いずれという気持ちがあったが、もはや「いずれ」はない。明日浮世から消えても、べつに不思議はない年齢になった。それならすべては一期一会、そのつど完結しなければならない。そういうのは簡単だが、実行するのはむずかしい。

ともあれありがたいのは、まだ元気なことである。暇を見つけては、虫を眺めて、ああでもない、こうでもないと考える。日本中いたるところに見られる、ふつうのゾウムシを見ているだけだが、それでも地方による個性がある。それが人間のする地域の区分と妙に一致していたり、していなかったりする。

思えば当然の話であろう。人間もまた生きもので、もともと自然のなかで暮してきたからである。東北から中国地方にいたる区分にしても、元来は本州というひとつの島になる以前の、独立だった島々の区分を反映している。虫はその過去にむしろ忠実に生きている。虫から見れば伊豆と箱根は別な土地で、それは人間にとっても同じだったから、伊豆と相模にわかれたのであろう。

知らないことがたくさんあって、人生は楽しい。未来とは、それに気づくことではないのだろうか。

ようろう　たけし／1937年神奈川県生まれ。解剖学者。東京大学および北里大学名誉教授。東京大学医学部卒業。医学博士。『からだの見方』（筑摩書房）、『バカの壁』（新潮社）など著書多数。

月刊 みんぱく

目次

FEBRUARY 2008
月刊みんぱく 2

01 エッセイ　世界へ世界から
未来
養老 孟司

02 特集 国境
国境の使命
庄司 博史
代理の国境
太田 心平
時代を映す鏡
―中国とモンゴル国の国境の町から
児玉 香菜子

北の国境、南の国境
鈴木 紀

ペルシア湾の小島
山中 由里子

08 モノ・グラフ
50年前のメコン河流域
田口 理恵

10 地球ミュージアム紀行
震災に立ち向かう心意気
三尾 稔

11 表紙モノ語り
現在に生きる頭飾りの伝統
池谷 和信

12 みんぱくインフォメーション

14 万国津々浦々
カントゥの褌（ふんどし）
西本 太

15 時論・新論・理想論
「脚のない鳥」からの便り
陳 天璽

16 外国人として生きる
蕙質蘭心（クヒツランシン）
一蘭のよき香りを日本で。台湾から嫁いで四半世紀
山口 隆子

18 地球を集める
伝統貨幣 危機一髪
嶺 信行

20 生きもの博物誌
水牛の放し飼い
高井 康弘

22 フィールドで考える
旅をしていた日々の記憶
門田 岳久

24 開館30周年記念事業のご案内
次号予告・編集後記

※表紙解説は11ページ